

博士論文審査報告

松本俊郎

「満洲国」から新中国へ

- 鞍山鉄鋼業からみた中国東北の再編過程、1940-1954年 -

1. 本論文の課題と構成

本論文は、著者が1988年に発表した『侵略と開発 - 日本資本主義と中国植民地化 - 』（御茶の水書房）以後、10年にわたる膨大な文献・資料の渉猟と研鑽の上に、「満洲国」時代から社会主義中国への転換期を生き抜いた、中国東北部の巨大製鉄所である鞍山製鉄所の経営実態を克明に明らかにした本格的な歴史実証分析である。

著者の中心的な課題は、第二次世界大戦から革命中国への激動の時代を背景に、「鉄は国家なり」といわれた国家の中核的産業であった鉄鋼業を対象に、中国東北部の鞍山製鉄所の個別経営分析を通して、「満洲国」期から社会主義中国への連続と断絶を明らかにすることであった。この課題は著者の最初の著書の問題関心であった「侵略と開発」の関係を企業分析を通してさらに実証することでもあった。

本論文の構成を以下に示す。

序章 課題と視角

第1章 満洲国末期の鉄鋼増産計画

第2章 中国東北の戦後情勢

第3章 鞍山の戦後情勢と満洲製鉄の戦争被害

第4章 採鉱、選鉱、銑鉄部門の被害と復旧

第5章 副産物部門（化学工業部門）の被害と復旧

第6章 製鋼・圧延部門の被害と復旧

第7章 鞍山の製鉄所の復興と日本人製鉄技術者

終章

以下、この章別にそって内容を紹介した上で、審査員の評価を述べたい。

2. 本論文の要旨

序章では、論文の課題として3点を挙げている。それは1)「満洲国」期の鞍山鉄鋼業の到達水準と特徴 2)鞍山鉄鋼業の戦後の復興条件を規定した内戦末期の東北ならびに鞍山における軍事情勢 3)「満洲国」期から社会主義中国への東北鉄鋼業の連続と断絶、についての考察である。

対象の時期は、1940年代から1950年代前半までである。この時期は「満洲国」の崩壊から、ソ連軍の中国東北進駐、国共内戦、社会主義中国建設と続く激動期である。鞍山鉄鋼業は、日本によって建設された昭和製鋼所(のちの満洲製鉄鞍山本社、鞍山鋼鉄公司)を中心としていた。とくに昭和製鋼所は、戦前日本帝国の勢力圏で第2位の生産規模を誇り、戦後の社会主義中国でも長い間、首位の地位を保っていた。

鞍山製鉄所では1940年代の深刻な戦争被害と内戦によって施設の破壊と建設が繰り返された。しかし、新中国ではソ連の援助を待たずに、わずか3~4年で急速な戦後復興を遂げている。この問題を解くためには、戦時と戦後の企業の連続性の問題を考察しなければならない。製鉄所の運営には資材や機器、原料という物的条件のみならず、設計、建設、操業に係わる専門知識や経験が必要である。戦後の鞍山での工場再建・復興のために必要な人的資源、すなわち技術的知識や労働力が、体制の違いを越えて「効率的」に継承されたのである。これまで研究者は、この問題に対して関心が希薄であったという。原因は、「満洲国」と新中国を断絶としてとらえることが当然視され、連続性を主張することは日本帝国主義を美化することになると、研究上暗黙の規制が働いたためである。このように、本論文では、この時期の鞍山製鉄業の研究が空白であることともに、問題設定としても「満洲国」から社会主義中国への連続性の視点が強調されている。

第1章では、1940年代の日本の支配下にあった満洲鉄鋼業がどのような特徴をもっていたかを生産と設備、原料調達、製品流通の各側面から検討を加えている。コークス原料炭の粘結炭は社内では自給できず、近くの本溪湖炭に依存していたが、本溪湖煤鉄公司の増産によって鞍山への供給が縮小すると、北票炭や華北への石炭依存が強まった。鉄鉱石でも、同様に中国東北から中国関内、さらに朝鮮への依存を強めた。また、生産された銑鉄は、製鋼用としてほとんど対日輸出に当てられた。このように満洲鉄鋼業は、戦時下日本の製鋼・圧延の原料供給基地としての性格を終始一貫持ち続けた。このため、銑鋼一貫生産は阻害され、銑鋼アンバランスという歪んだ構造が鞍山製鉄業の特徴となった。

第2章は、「満洲国」崩壊後の鞍山を中心とする政治的軍事情勢の分析がなされている。中国東北の軍事情勢を4期に分け、第一期関東軍支配期(~45年8月中旬)、第二期ソ連軍支配期(~46年3月)、第三期国民党軍攻勢期(1946年4月~1947年4月)、第四期共産党軍攻勢期(1947年5月~)と区分する。鞍山製鉄所を含む東北部に対する国共両党の執着と、ソ連とアメリカの対中政策が複雑に絡み合い、東北の軍事情勢は二転三転した。とくに、ソ連がアメリカの対中政策の圧力のなかで、中国共産党と国民党の間を揺れ動いたために複雑な展開をたどったことを解明している。

第3章は、戦後の鞍山製鉄所の戦争被害と内戦被害の実態を明らかにしたものである。戦争被害は、米軍による空襲、ソ連軍による施設の撤去、国民党、共産党の黙認の下での一般中国人の施設破壊、共産党軍の撤退の際における高炉爆破、国民党軍の撤退工作と一般中国人の略奪など7回におよぶ。本論文ではこのような支配勢力の交替と鞍山製鉄所の被害の実態を克明に明らかにしている。とくに、ソ連のスターリンによる施設撤去命令は

最大の被害となった。また、この間、共産党軍の国民党系技術者に対する政策は、実利的でそれなりに人道的であったことが指摘され、その後の新中国での日本人技術者優遇政策の前史をなしていることを実証している。

第4章～6章は、採鉱、選鉱、銑鉄、副産物、製鋼、圧延の各部門・施設ごとに被害と復旧の状況を詳細に明らかにしている。戦後行われたアメリカのポーレー調査団の資料と著者自身による聞き取りを、ふんだんに取り入れて被害の実態と復旧の程度を明らかにしている。

復旧の過程では、炉体を初めとする基本的な構造物が残されており、残存設備の間での相互の部品の融通や新規の補充によって撤去あるいは破壊された重要パーツを修復することも可能であった。すなわち、戦争と内戦の被害が大きいことは確かではあったが、修復可能な状態でもあった、という二面性を指摘している。

なかでも、新中国建設の1949年から52年の「3年恢復期」に、製鋼・圧延部門では、高度な知識と技術と経験を身につけた日本人技術者、国民党系技術者の存在、操業内容を詳細に記録した社内資料、鞍山鋼鉄公司指導部の意欲的で柔軟な取り組み、若い中国人技術者、中国人労働者の高い勤労意欲、などが急速な鉄鋼生産力の回復の条件となったことを指摘している。

第7章では、戦後の内戦期から新中国建設期において、鞍山に残された満洲製鉄の日本人技術者の役割について述べている。本論文のテーマ「侵略と開発」にもっとも係わる部分である。

ソ連支配期には日本人技術者は工場施設の撤去作業への協力だけであったが、1946年4月からの国民党支配期には、残留を求められた日本人技術者は約1600人で鞍山組と呼ばれた。47年夏以降から次第に帰国が許可されるようになったが、高級技術者は残された。国民党支配の下では施設の修復作業が中心であったが、1948年2月以降の共産党支配期には鞍山組は約100人（含む家族約280人）で、一時安東に幽閉されたが（破格の待遇であったが）、1948年11月以後鞍山に戻り技術指導に当たった。労働者も満洲製鉄時代以来の中国人が担った。日本人技術者は製鉄所の技術指導のみならず、中国人技術者に技術の伝承を図り、積極的に新たな技術革新の提言をした。「技術的知識と操業経験を身につけた彼らの存在は、解放直後の数年間においては、工場設備を復興し生産を軌道に乗せる上で不可欠であった」と、著者は社会主義中国における「満洲国」の日本人技術者の役割を高く評価している。また、このような日本人技術者を待遇した共産党を「実利の重視に徹した姿勢」であり、「ある種の懐の深さが要求される政治的対応」であったと評している。新中国では1952年後半から第一次五カ年計画が始まり、ソ連人技術者が指導にあたった。このため日本人技術者は不用となり、1953年3月末に日本人技術者はすべて帰国した。日本人技術者の中国残留は、日本の敗戦から7年7カ月が経過していた。

終章では、各章のまとめとその後の鞍山製鉄業の展望を述べている。その後の鞍山製鉄所は、社会主義中国の最大の国有製鉄企業として、長期にわたって支配的位置を占め続け

た。しかし、東西冷戦と中ソ対立のなかで、1960年代には総力戦準備のため製鉄業の生産施設は内陸部に移され、文化大革命による生産破壊もあり、鞍山製鉄業は衰退した。また、1980年代には上海宝山鋼鉄会社が新設され生産高でも追いつかれた。現在鞍山製鉄所は、施設の老朽化と非能率性によって国営企業改革のひとつの焦点となっている。

3. 本論文の評価と問題点

本論文の最大の成果は、「満洲国」と社会主義中国への連続と断絶の問題を、鞍山製鉄所という個別企業経営を通して、克明緻密な実証によって明らかにしたことにある。

「満洲国」から新中国への時代は、日本の中国侵略による戦争の時代から中国革命と社会主義建国という激動の時代であり、研究史的にも空白の時期であり、資料の上でも研究の極めて困難な時代であった。なによりも、この時代の中国東北部の歴史分析のためには、中国、日本、アメリカ、ソ連の錯綜した国際関係、軍事情勢を理解しなければならず、日本語、中国語はいうまでもなく、英語、韓国語、ロシア語など多くの言語による文書解読を必要とする。著者はこの激動の時代を、「満洲国」の鞍山製鉄所を対象にして、持ち前の語学力を生かして中国の現地文書館はいうまでもなく、台湾の文書館、アメリカ議会図書館などの膨大な資料を閲覧し、また鞍山製鉄所の日本人元従業員のみならず、多数の中国人への聞き取りや二百通以上に及ぶ手紙のやりとりを通して解明した。とりわけ、製鉄所の施設配置や原料・副産物にいたる実務的知識と工場の技術革新にとまなう技術的知識を、設計図や日本人技術者からの聞き取りによって丹念に理解し、復元分析する努力は敬服すべきものがある。このような膨大な労力投入と緻密な実証分析の能力は、高く評価されねばならない。

ここで、著者が最初に課題として掲げた三つについて検証する。

第一の「満洲国」期の鞍山鉄鋼業の到達水準と特徴について。日本鉄鋼業に製鋼原料を供給するという基本的な性格は敗戦にいたるまで変わることはなかった。そのために銑鋼アンバランスという歪んだ構造を満洲鉄鋼業が最後まで持ちつづけたことを初めて本格的に明らかにした。すなわち、これまでの満洲鉄鋼業の研究は、1930年代までが主な対象であり、満洲国崩壊期まで分析を広げて、その特徴を明らかにすることはなかった。それゆえ、1940年代の満洲国末期の満洲鉄鋼業の実態を解明したことは、本論文の第一のメリットである。

第二の課題である鞍山鉄鋼業の戦後の復興条件を規定した内戦末期の東北ならびに鞍山における軍事情勢について。中国東北部の内戦期の複雑な軍事情勢を各種資料を整理しながら初めて詳細にその全体像を解明したことは、本論文の第二のメリットであろう。すなわち、鞍山製鉄所の支配をめくり、ソ連軍、国民党軍、共産党軍が入り乱れて7回にわたり支配勢力が、二転三転したことを初めて明らかにした。なかでも、ソ連軍が鞍山を支配していたときに、中ソ友好同盟の相手であった国民党軍と一定の距離を取り、当初は中国

共産党寄りに対応しながら、アメリカの対中政策のなかで、中国共産党とも距離を取りはじめるなど、複雑で一貫しないソ連の対応を明らかにしたことは特筆される。

第三の課題である「満洲国」期から社会主義中国への東北鉄鋼業の連続と断絶について。先にも述べたように、この点が本論文の白眉をなす。とりわけ、「満洲国」時代の日本人技術者の新中国への残留とその役割を、社会主義中国の製鉄所運営にとって「不可欠な存在」であったと述べたことは、本論文のもっとも衝撃的で論議を呼ぶところであろう。著者の一貫したテーマである「侵略と開発」を媒介するものとして、日本人技術者の社会主義中国建設への協力を実証したことが、本書の最大のメリットであろう。

もちろん、こう言ったからといって著者が、「満洲国」時代の日本の中国侵略を弁明しているわけではない。「満洲国」時代の鞍山鉄鋼業の性格と特徴を、日本の戦時経済に従属したもので、銑鉄供給基地化による銑鋼アンバランスという歪みをもたらしたこと、また新中国になって初めて銑鋼一貫化を達成した鞍山製鉄業の戦前との差異と断絶を明瞭に指摘している。著者の「開発」の力点は、「満洲国」時代ではなく、日本人技術者が係わった新中国の建国時代にある。「侵略」の遺産は、社会主義新中国に引き継がれたのである。ここでも、著者は、社会主義中国における日本人技術者の役割を一面的に評価するのではなく、中国の解放を推進した中国共産党指導部と中国人技術者、中国人労働者の建国にかける熱意を評価し、中国製鉄業の建設の意義は、彼らの不屈の努力の賜物であることの指摘を忘れてはいない。

以上が本論文の意義であるが、残された課題がないわけではない。

第一は、鞍山鉄鋼業からみた中国東北の再編という大きなテーマに対して、本論文は鞍山製鉄所の一個別企業の分析であり、中国東北部の全経済構造を今後明らかにする必要がある。

第二は、戦前の「満洲国」期の鞍山製鉄業の原料の供給構造は解明されているのに対して、戦後の新中国における鉄鋼の市場構造 - 原料の供給構造や販売経路の実態 - が必ずしも明らかでない。企業統計、政府統計など新中国の統計上の問題もあり、かなり困難をとまなうと思われるが、戦後の鉄鋼業の市場構造・供給構造を明らかにすることも今後の課題であろう。

第三は、連続と断絶の問題である。鉄鋼業設備の残存と利用は、破壊の程度によるもので偶然性に左右される。とくに軍事的破壊の場合には、壊滅か、残存かは、偶然的なものである。物的な残存利用や人的資源の残留利用は、たしかに連続性のひとつの要因であるが、必ずしもすべてではない。政策体系、資本構造、労働力構造など、「満洲国」と社会主義中国との体制的差異にみる構造論的視角も今後必要ではないか。戦時期の「遺産」を利用する新中国指導部の政策体系のあり方や国際的諸条件の変化にも断絶性をみることができよう。まさに、戦時と戦後の連続性と断絶性の議論は、多面的多角的な視点を必要としており、連続と断絶をいかに統一的に把握するかは、今後の課題であろう。

以上のように本論文にも、若干の問題点を指摘できるが、このことは、研究史的にも空白であり、資料的にも極めて困難な対象であった「満洲国」期と中国社会主義建国期における鉄鋼業の実態を、初めて統一的に、しかも極めて詳細に、明らかにした本論文の価値をいささかでも損なうものではない。これらの指摘した諸点は著者の今後の研究によって発展的に解決されていくものと期待される。

われわれ審査員は 6 月 1 日、著者と 1 時間半に及ぶ質疑応答をおこない、上記の諸点を中心に質問したが、本人も今後の課題としてそれらを十分了解している。口頭試問、その他所定の手続きの結果にも照らして、審査員一同は、松本俊郎氏に、一橋大学博士(経済学) の学位を授与することを適当と判断する。

2001 年 6 月 13 日

審査員

森 武磨

西成田豊

江夏由樹